あの津から

— 三重大学工学部同窓会誌 —

復刊第10号

MIE UNIVERSITY

三重大学工学部同窓会

https://www.dousoukai-mie-ueng.org/

2023年6月

あの津から

ー 三重大学工学部同窓会誌 ー

復刊第10号

三重大学工学部同窓会
https://www.dousoukai-mie-ueng.org/
2023年6月

目 次

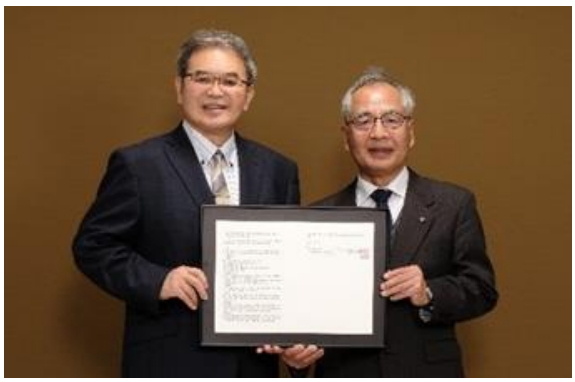
工学研究科と日本技術士会中部本部が協定を締結	……	1
工学部同窓会研究支援成果報告会及び審査会	……	2
ロボコン支援報告	……	4
同窓会寄付講座「創成工学：先輩から学ぶ先端科学技術」	……	6
三重大学の産学連携と㈱三重ティーエルオーについて	……	8
名古屋で工学部同窓会を開催	……	12
三重大のツルの経験と約半世紀前の三重大での経験	……	13
起業の決断	……	16
ロック徒然草～音と心の旅	……	20
三重大学発ベンチャー企業　株式会社プロジェクトＭ	……	22
工学部同窓会　会計報告	……	24
（前々年度　令和３年４月１日～令和４年３月 31 日）		
会計監査報告書	……	25
卒業生人数	……	26
復興基金パンフレット	……	30
編集後記	……	32

大学院工学研究科と
公益社団法人日本技術士会中部本部が
包括的連携・協力に関する協定を締結

令和４年１月 24 日(月)、三重大学大学院工学研究科は公益社団法人日本技術士会中部本部との包括的連携・協力に関する協定を締結しました。公益社団法人日本技術士会中部本部の平田賢太郎本部長と、池浦良淳工学研究科長が、協定書への調印を行いました。

今回の連携は、三重大学大学院工学研究科の先端研究を実施する研究者・教員とその成果等、公益財団法人日本技術士会中部本部の実業に精通した技術者等、双方の資源を有効活用することにより、教育、学術、科学技術、産業等の分野で、地域の発展と人材の育成に貢献することを目的としています。

今後、公益財団法人日本技術士会中部本部とは、講師派遣など産学官技の人材交流、教育・研究・開発及び科学技術を通した地域振興及び防災等の地域社会の貢献等、相互に連携した取組が行われる予定です。



工学部同窓会研究支援成果報告会及び審査会

研究支援担当　松岡　守（5 期電気）

2022 年 12 月 21 日（水）に下記の要領で三重大学工学部同窓会研究支援成果報告会及び審査会を行いました。

報告は 2022 年に研究支援をした 3 件で，この一年間で得られた研究成果が披露されました。

審査は来年の研究支援を希望する 2 件について行い，審査の結果 2 件とも研究支援として 50 万円ずつを贈ることに決定しました。

今後も同様に研究支援を行っていく予定です。より多くの応募を期待しています。

スケジュール：

13:30　冒頭挨拶　研究支援担当　松岡　守

今年度採択分の成果報告（15 分報告＋5 分質疑）

研究費支援テーマ（各 50 万円）

13:35　①　國枝　昂希／Nguyen Hung　無機素材化学研究室　M2／D3

指導教員：石原　篤先生

「ベトナム石炭灰分からのゼオライト合成とその反応性解析」

13:55　②　岩崎晟也・奥山陽斗　M1

指導教員：北　英彦先生

「フォニックスを学習するタブレットアプリケーションの研究」

14:15　③　松下真也　システム工学専攻（計算機工学研究室）D3

指導教員：高瀬治彦先生

「少数言語を対象とした書き起こし作業の自動化」

14:35　ご講評

工学研究科副研究科長　中村浩次先生

休憩／審査会準備

来年度応募分のプレゼンテーション（10 分プレゼン＋5 分質疑）

15:00　①　向井　亨　機械工学専攻流動制御研究室　4 年

指導教員：高橋　護先生

「中・小規模乱流渦構造による輸送現象の非相似性の測定」

15:15　②　福田燦太　情報工学専攻人間情報学研究室　M2

指導教員：林田祐樹先生

「脳内への微小電流刺激による神経回路駆動～刺激エネルギー削減法の開発」

15:30　休会，審査

審査結果発表，表彰

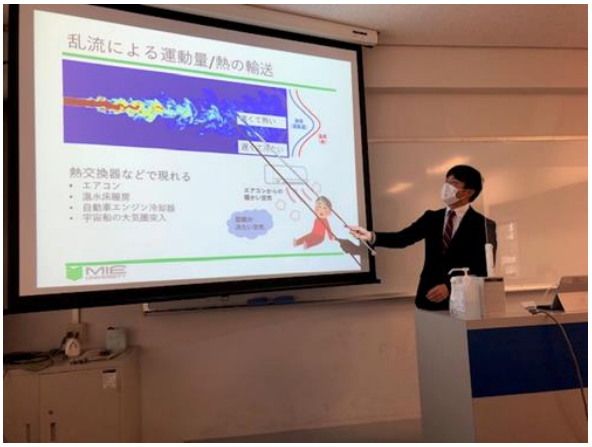
15:40　再集合

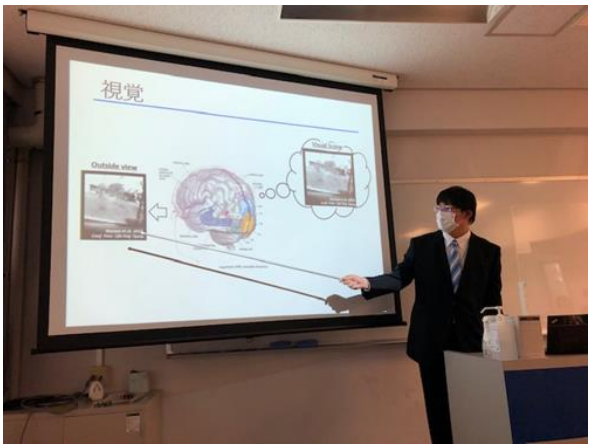
審査結果発表

同窓会柿崎会長より目録授与

ご講評　工学研究科長　池浦良淳先生

15:50　閉会





審査会プレゼン

目録授与

池浦研究科長によるご講評

第 18 回中学校技術・家庭科創造
アイディアロボットコンテスト三重県大会

研究支援担当　松岡　守（5 期電気）

標記（以下三重県大会）が 2022 年 11 月 12 日（土）三重大学第一体育館で開催されました。これは、全国の中学校の技術・家庭科の先生方の組織である全日本中学校技術・家庭科研究会（http://www.ajgika.ne.jp/）が毎年開催している創造アイディアロボットコンテスト全国中学生大会（http://ajgika.ne.jp/~robo/）に向けての三重県大会で、その後東海・北陸大会を経て全国へと進むものです。三重県大会は三重県中学校技術・家庭科研究会が主催、三重大学教育学部技術・ものづくり教育講座が共催の形で開催しています。

工学部の OB としては三重大学工学部への進学志望者が増えてほしいところです。工学部の先生方は高校に出向いて三重大学工学部の案内をされていますが、高校ではすでに方向付けができてしまっていて、もっと早い段階で工学に関心を持ってもらう活動をしないといけない、といったお話を聞きます。ロボットコンテスト（以下ロボコン）としては高専や大学生向けのものが良く知られていますが、中学段階でもこうしたロボコンの取り組みがあり、そうした機会に三重大学工学部の案内をさせていただくと効果的と考えられます。

そこで三重大学工学部・三重大学工学部同窓会として、義務教育段階のこうしたロボコンの取り組みを支援してはどうかと三重大学工学研究科池浦研究科長及び三重大学工学部同窓会役員の皆さんと相談させていただき、賛同を得て支援することとなりました。

三重大学工学部としてはロボットのデモ等、同窓会として今年度は 20 万円の助成をすることといたしました。

なお、支援対象となるロボコンとしては Jr.ロボコン in 三重（以下 Jr.ロボコン）もあります。これは国際 Jr.ロボコン in 三重という、国内外の中学生が集まりその場でグループを結成、合宿形式でロボットを作り上げ、対戦するという大掛かりな取り組みを三重県にて三重大学が中心となって 2005 年に実施されましたが、一過性のものにするには惜しいと三重大学教育学部が中心となり県内の中学校の先生方と共に県内の中学生を対象に毎夏開催されているものです。

三重県大会は教材メーカー、Jr.ロボコンは三重県、四日市市、津市の公共団体の支援を得てきていますが、いずれも不況や財政緊縮の煽りでこれまでどおりの支援が期待できない状況です。したがって三重大学工学部としては同工学部の紹介の機会が得られること、三重県大会や Jr.ロボコンの実施側としては財源の一部が確保できるということで、どちらにとっても有益な形となります。

なお、同窓会で助成を行うことを決定したのは 2022 年 9 月であり、この年の Jr.ロボコンは 8 月 18 日から 21 日の 3 泊 4 日ですでに終了していますので、今年度の支援対象は三重県大会のみとなります。

三重県大会に話を戻します。この大会は基礎、計測・制御、応用・発展の 3 部門があります。これらに対しそれぞれ県内の中学校から 15、10、13 のエントリーがあり、大会会場の三重大学第一体育館に集結、大会が繰り広げられました。日程は以下のとおりで、ほぼ予定されたとおり進められました。

【午前の部】

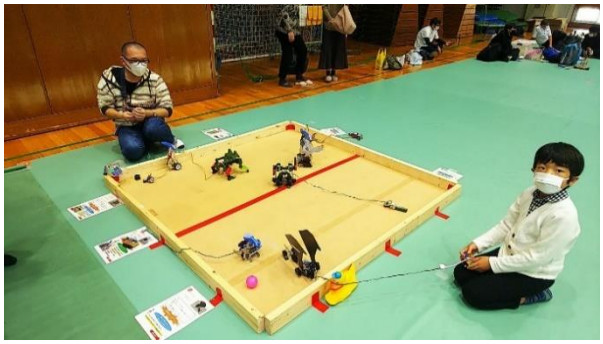
8:30～ 9:30　受付・ロボット車検
9:30～10:00　開会式・ルール説明
10:00～11:30　各部門予選リーグ
11:30～12:30　昼食休憩

【午後の部】

12:30～13:00　各部門決勝トーナメント（ベスト4まで）
13:00～13:30　各部門準決勝・決勝
13:30～14:00　ロボット交流会・ロボット審査
14:00～14:30　閉会式・表彰式

大会時のスナップを以下に示します。

決勝戦の様子（保護者等の姿もちらほら）



中西栄徳先生（23 期 M）によるロボットデモ

表彰式の様子

池浦研究科長による講評

三重県大会は通常、県内のどこかの中学校の体育館で行われますが、今回はたまたまですが三重大学の第一体育館で開催されました。ロボット作りをしてきた中学生が三重大学のキャンパスに入るだけでも強い印象を持ったでしょうし、加えて中西先生のロボットのデモ、そして最後に池浦研究科長に具体的な講評をしていただいたことも合わせて、三重大学工学部の存在感を感じ取ってもらうとても良い機会に、また、42 名の保護者等の観覧者の記憶にもしっかり刻まれたと思います。

同窓会寄付講座「創成工学：先輩から学ぶ先端科学技術」

同窓会副会長　飯田　和生（6期電気）

工学部同窓会の寄付講義「創成工学：先輩から学ぶ 先端科学技術」は 2014 年の開講以来9年目を迎え、講師の卒業生も延べ 28 名になり、今年度の後期も全8回の講義の実施しているところです。昨年度からは2人の講師が交代して、講師に新しい卒業生が加わって頂き、次の日程で講義をして頂いています。今年の講義は7回が対面で、1回は仕事の都合で対面かリモートか決めるという形態で進めることで始まりましたが、対面授業の予定でも直前でコロナウィルスに感染する学生が出るとハイブリッド授業という形で進んでいます。

10 月6日（木）　5～8限　　中村　彰吾　（第8期機械工学科）
地球を救う水力エネルギー：60年を経て再び水力の時代に

10 月 13 日（木）　5～8限　　都竹　広幸　（第9期機械工学科）
エンジン技術の進化の歩みと新たなモビリティ社会の行方！？

12 月8日（木）　5～8限　　阪下　敬一　（第9期資源化学科）
新製品開発～商品化までのプロセスと、技術屋として知っておきたい会社の銭勘定

12 月 15 日（木）　5～8限　　大田　文夫　（第8期電子工学科）
電力の自由化と私

12 月 22 日（木）　5～8限　　薗田　享志　（第5期機械工学科）
「リーダーシップ」と「マーケティング」

1月 12 日（木）　5～8限　　出口　達也　（第 12 期電気工学科）
半導体製造とエンジニアの考え方

1月 19 日（木）　5～8限　　佐藤　幸喜　（第 10 期工業化学科）
科学技術の大変革時代にエンジニアを目指す学生に期待したいこと

1月 26 日（木）　5～8限　　高橋　俊之　（第4期電気工学科）
キャリアのマネジメント

授業の概要は三重大学のシラバス https://syllabus.mie-u.ac.jp/?action=display&id=18177　で公開されていますので、ご覧頂ければ幸いです。

実施年		2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025
担当者	1	武田M		谷村C			廣田C			出口E			E
	2	上村E		野崎E			杉山E			大田E			M
	3	岩部E	山本M			工藤E		高橋E			川口E		
	4	酒井M			川戸E			中村M			都築M		
	5	由利E			大槻C			阪下C			吉永C		
	6	浜津E			吉村M			奥村M	都竹M			M	
	7	岡崎E				早川C			佐藤C			C	
	8	成瀬M				福森M			薗田M			C	
		M3 E5	M4 E4	M3 E4 C1	M3 E3 C2	M2 E3 C3	M2 E3 C3	M3 E2 C3	M3 E2 C3	M3 E3 C2	M3 E3 C2	M2 E3 C3	M3 E2 C3

この講義は 2014 年の後期から始まり、初年度の講師は機械工学科と、電気工学科の 1 期生にお願いしたものでしたが、機械、電気、化学の3つの学科は似たような卒業生の人数ですので、3年間で講師の出身学科にできるだけ片寄りがないように、せっかく講義資料を用意して頂くので、資料が使えるように同じ講義を3回お願いすることを基本として表のように運用しています。コロナ禍以前の講義では資料は教室で印刷をしたものを配布していましたが、遠隔授業になってからは、Moodle と言う教育支援システムを使って、受講生に配布するようになり、授業風景も写真にあるように学生が手元の端末で授業資料を見ながら授業が進んでいくという形に変わりました。

講義は当初 30 名ほどの履修申告者で、20 数名の受講者でしたが、次第に人数が増え、今年の学生は 62 名が履修登録し、50 数名の学生が毎回受講しています。

2023 年度に向けては新に3人の卒業生に講義をお願いしました。大学の講義は原則対面での授業が行われていますが、非常勤講師による授業は対面授業、遠隔授業のどちらでも講師の都合で選べます。現役で忙しい卒業生にも講義をお引き受け頂ける可能性が広がった点が大きな利点ですので、今後は講師の都合に合わせて、遠隔と対面を選んで頂くこととしています。

この講義の候補者は1期生からの通算で 185 名と依頼できない卒業生が多数出るほどあげさせて頂いていますが、授業はずっと続きますので、後輩の前でご自身の話、会社の話、業界の話などをしてみたい・しても良いと思われる方がいましたら、自薦、他薦を問わず講師をお願い致します。適当な卒業生の方をご存じであれば、ご紹介をお願い致します。今までのところ講師をお願いしているのは機械、電気、化学系の学科の卒業生のみで、建築、情報、物理の卒業生の情報が非常に不足していて、将来の講師の候補者リストにも2名をあげているのみです。3つの学科の設立が遅いと言うこともあって、それらの学科の卒業生はまだ若いと言うこともあるかとは思いますが、3つの学科の卒業生の合計人数は機械、電気、科学の各学科の人数を超えていますし、建築学科ができた 12 期以降の候補者リストには 74 名もの卒業生をあげさせて頂いています。

三重大学の産学連携と㈱三重ティーエルオーについて

同窓会副会長　飯田　和生（6期電気）

㈱三重ティーエルオー（TLO）については 2016 年発行の本誌第4号で簡単に紹介させて頂きましたが、TLOも 2002 年2月に設立されて 20 年を超え、8月には工学部同窓会が新株主になりました。

これにより三翠同窓会（生物資源学部）、医学部三医会（医学部医学科）、工学部同窓会の3つの主な同窓会と三重大学生活協同組合の4つの三重大学内の大きな団体が株主としてTLOの事業運営に参画する体制となりました。これを機会に三重大学、工学部の産学連携と㈱三重TLOについて紹介させて頂きます。

㈱三重TLOは 2002 年2月に設立された三重県内の大学や高等専門学校などの研究者がもつ研究・技術シーズを産業界に移転するための橋渡し役となる組織で、TLOとは、Technology Licensing Organization（技術移転機関）の略称です。

2002 年4月に文部科学省・経済産業省に事業の実施計画に対する承認を受けた承認TLOとして認可されて事業活動を続けています。承認TLOとしては現在全国に 32 機関がありますが、本誌第 4 号では 37 機関と書いており、それ以降では1機関が承認され、6機関が承認手続きをしなかったり、取り下げたりしています。

三重大学の様な地方国立大学で外部型TLOとして活動が続けられているのは以下で紹介するように三重大学全体として比較的活発な研究活動に支えられてのことです。

先ず、三重大学の規模ですが、表1は 2020 年 5 月 1 日時点の専任教員数で見た国公私立大学と国立大学の中での三重大学の位置づけを示しています。三重大学は国公私立 774 大学中 51 位、国立 86 大学中 27 位に位置しています。三重大学は全部の大学の中では規模の大きな大学と言うことになりますが、単科大学などの規模が小さい大学を除くと中規模の大学となります。

表 1 専任教員数から見た三重大学の規模（2020 年）

(a) 国公私立大学

順位	大学名	教員数
1	東京大学	3,888
2	京都大学	3,439
3	大阪大学	3,283
4	東北大学	3,066
5	九州大学	2,377
6	名古屋大学	2,328
7	北海道大学	2,310
8	日本大学	2,292
9	昭和大学	2,261
10	慶應義塾大学	2,163
11	筑波大学	1,897
12	早稲田大学	1,828
13	広島大学	1,792
14	北里大学	1,668
15	近畿大学	1,649
16	東海大学	1,607
17	神戸大学	1,516
18	岡山大学	1,448
19	東京女子医科大学	1,432
20	自治医科大学	1,406
21	立命館大学	1,404
22	埼玉医科大学	1,396
23	新潟大学	1,350
24	千葉大学	1,305
25	順天堂大学	1,304
26	帝京大学	1,264
51	三重大学	789

(b) 国立大学

順位	大学名	教員数
1	東京大学	3,888
2	京都大学	3,439
3	大阪大学	3,283
4	東北大学	3,066
5	九州大学	2,377
6	名古屋大学	2,328
7	北海道大学	2,310
8	筑波大学	1,897
9	広島大学	1,792
10	神戸大学	1,516
11	岡山大学	1,448
12	新潟大学	1,350
13	千葉大学	1,305
14	金沢大学	1,216
15	鹿児島大学	1,133
16	長崎大学	1,122
17	東京工業大学	1,044
18	信州大学	1,017
19	徳島大学	947
20	山口大学	920
21	東京医科歯科大学	863
22	富山大学	838
23	熊本大学	824
24	琉球大学	820
25	群馬大学	811
26	山形大学	793
27	三重大学	789

表２　大学別共同研究数(2020 年)

(a) 共同研究全体

機関名	共同研究件数	順位
東京大学	1,977	1
大阪大学	1,382	2
東北大学	1,306	3
京都大学	1,300	4
慶應義塾大学	734	5
九州大学	716	6
東京工業大学	695	7
北海道大学	636	8
名古屋大学	619	9
神戸大学	586	10
早稲田大学	545	11
信州大学	447	12
筑波大学	446	13
広島大学	444	14
千葉大学	362	15
岐阜大学	347	16
東京農工大学	329	17
名古屋工業大学	326	18
岡山大学	316	19
金沢大学	311	20
熊本大学	309	21
山形大学	292	22
大阪府立大学	284	23
徳島大学	283	24
三重大学	278	25
横浜国立大学	268	26

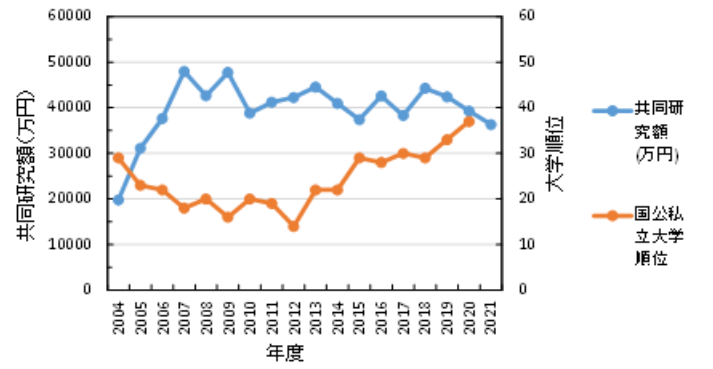
(b)中小企業との共同研究

機関名	件数-相手先-中小企業	順位
東京大学	473	1
東北大学	344	2
大阪大学	311	3
京都大学	293	4
信州大学	179	5
神戸大学	178	6
三重大学	177	7
九州大学	169	8
岐阜大学	162	9
慶應義塾大学	156	10
北海道大学	146	11
筑波大学	131	12
東京農工大学	128	13
名古屋大学	124	14
広島大学	120	15
熊本大学	115	16
徳島大学	112	17
早稲田大学	111	18
名古屋工業大学	109	19
大阪府立大学	106	20
岡山大学	105	21
千葉大学	103	22
東京工業大学	101	23
山形大学	99	24
岩手大学	95	25
群馬大学	95	25

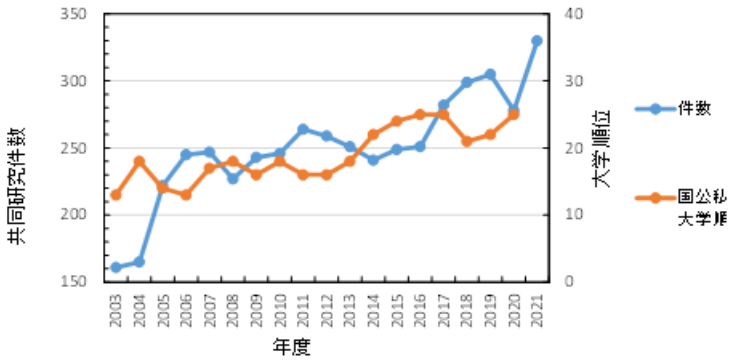
(c) 県内中小企業との共同研究

機関名	件数-相手先-中小企業-同一県内	順位
東京大学	261	1
大阪大学	112	2
三重大学	109	3
東北大学	107	4
京都大学	102	5
信州大学	81	6
東京農工大学	74	7
慶應義塾大学	69	8
岐阜大学	68	9
九州大学	63	10
東京工業大学	61	11
大阪府立大学	60	12
名古屋工業大学	57	13
広島大学	52	14
北海道大学	49	15
早稲田大学	48	16
熊本大学	48	16
岩手大学	47	18
岡山大学	47	18
神戸大学	46	20
東京理科大学	45	21
茨城大学	43	22
筑波大学	40	23
静岡大学	40	23
鳥取大学	40	23
鹿児島大学	40	23

表2は大学別の共同研究件数を示しています。共同研究全体の件数は大学規模相当の共同研究を実施している大学となりますが、共同研究相手先として中小企業に限定すると全大学中7位、更にその相手先として大学がある県内の中小企業に限ると3位と更に高い順位で、三重大学以外の5位までは、三重県内の株式会社が 1.7 万社余りに対して、東京は 52 万社、大阪は 21 万社と、企業がたくさん立地している大きな大学となっています。三重大学は共同研究の4割近い相手先として県内の中小企業と行っていて、県内の産業振興に寄与する割合が高い大学であることが分かります。独立法人化後に地方大学には大学が立地する県



(a) 共同研究額



(b) 共同研究件数

図１ 三重大学の共同研究から見た位置づけ

の活性化に寄与することが国から求められており、それを高いレベルで忠実に実行している大学と言えるかと思います。

図1は共同研究の額と件数から見た三重大学の位置づけを示しています。共同研究額では 2006 年以降4億円を前後しているものの、最近の大学順位は次第に低下しています。件数で見ると年々増加する傾向にあるものの大学順位は低下していて、他大学は三重大学以上に共同研究の件数を増加させていることが分かります。

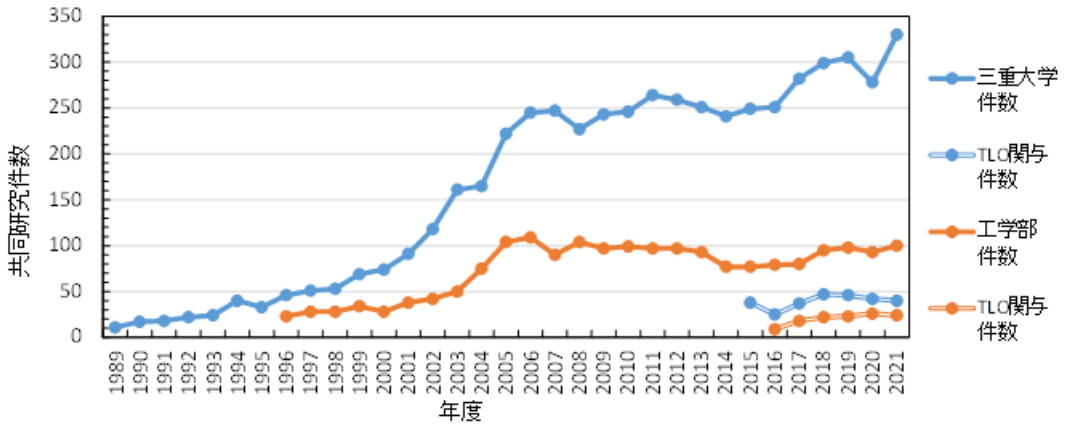


図２　三重大学全体と工学部の共同研究件数の推移とＴＬＯの関与件数

図２は三重大学全体と工学部の共同研究件数の長期推移と㈱三重TLOの関与件数を示しています。共同研究件数は 2000 年代前半にかけて大きく伸び、大学全体としてはしばらく 250 件程度で推移し、2016 年以降 300 件前後に伸びていますが、工学部としては 100 件前後の件数でずっと推移しています。工学部の教員数は、各学科の設立当初の人数を足し合わせると 137 人になるものの学科の増設が物理工学科で終わってからは教員定員削減が目立つことになり減りだして、2010 年で 122 人、2020 年で 99 人と減り続けています。その中で、共同研究の件数がほぼ一定というのは学部全体から見ると停滞とも取れますが、教員あたりの件数はゆっくりとしていますが増加しています。㈱三重TLOは従業員 7 名程度の小さな所帯ながら工学部の共同研究の 1/4 近く、三重大学全体の 1/6 近くの共同研究の成立に寄与しています。

図3は三重大学の特許実施収入金額の推移と大学順位を示しています。大きな実施収入があった年の全大学中 10 位以内に入っていますが、これらは生物資源学部と医学部から出た特許です。工学部からは特許件数は多いものの、大きな特許実施収入となるような特許には恵まれていません。

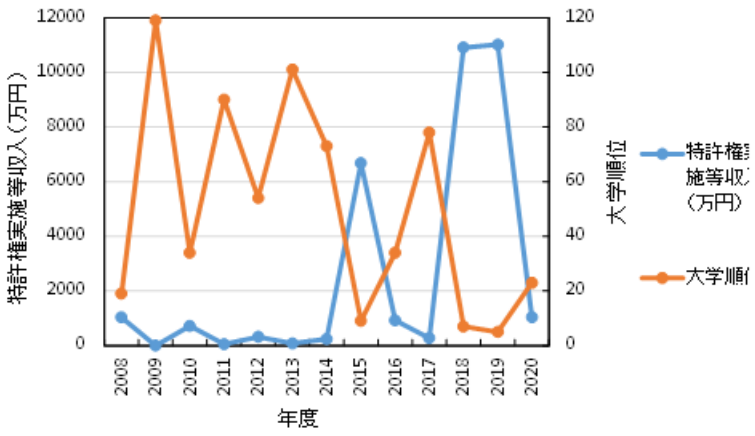


図３　三重大学の特許実施収入と順位

㈱三重TLOは、

①三重大学と連携し、企業・団体・自治体への支援による技術／産業基盤の確立と向上に寄与する。

②三重大学の教育、研究、社会貢献を支援し、三重大学の価値創造に寄与する。
の２つを使命として活動している企業で、それらの使命を実現するため、設立当初からの三重大学に対する技術相談の窓口業務や特許関連業務などの分野で活動していますが、その他に他のTLOでは見られない最近の活動について次に紹介させて頂きます。

㈱三重TLOでは県内企業を中心に三重大学に来る技術相談の窓口を担っていますが、企業からの相談事に対して大学教員では対応できない種類の相談も多数あります。それらにも対応できる様にと、工学部の卒業生を中心に専門家人材バンクと称して、卒業生に協力をお願いしています。卒業生には企業だけでなく、三重大学の特許についてお手伝い頂いたり、商工会議所が開く講演会の講師を務めて頂いたりしています。

三重大学の卒業生を採用して頂いている企業の中には自社の事業とは直接関係がない学部・学科の卒業生を、三重大学生ならばと、採用頂いている場合が多々あります。また、新規事業を始めるに当たって、社内に教育を担当できる人材が不足している場合もあります。この様な場合に必要となる社員教育として役に立つセミナーやリカレント教育事業を開始しています。今のところはセミナーを開きつつ、コンテンツを充実している状態ですが、新規事業を始める企業向けに 12 月末から 40 数時間のリカレント教育の授業を実施中です。

県内出身のスキルの高い三重大学の卒業生が三重県内にUターン転職の結果、企業が元気になれば、地元企業も元気になると言うことと地元企業の中には新卒の三重大学卒業生よりもたくさんのUターン転職の卒業生を苦労しながらも採用していると言うこともあり、「ひと・しごとマッチングサポート」と称して、人材紹介事業を行っています。開始当初は成約もありましたが、最近は卒業生からの問い合わせ自体がごく少なくなっています。ただ、求人情報は三重県産業支援センターとの協力関係にあることもあって入り続けていますので、関心がありましたら、ご一報願います。

名古屋で工学部同窓会を開催しました

同窓会会長 柿崎 賢一（4期電気）

この度 複数の一期の先輩からの発案で下記の同窓会を開催しました。学科、期を超えた交流ができとても有意義なひと時になりました。

参加は関東、関西、三重、名古屋近郊から19名です。

●日時 10/22 土曜日 1700 から　●場所 名古屋 近鉄駅の東すぐ 下町の牛（焼き肉）

今後 毎年恒例にします。

10 月第 4 土曜日 1700 から。同じ場所で。

次回は目標30名の参加を見込んでいます。会費 3000円。

参加をされる方は事前に 柿崎までご連絡ください。

柿崎　kakizaki88@gmail.com　09070443677

基本情報

店名	焼肉ホルモン 下町の牛
住所	愛知県名古屋市中村区名駅4丁目 24-24 1 階
アクセス	名古屋駅ミヤコ地下街 4 番出口から徒歩 1 分、スパイラルタワーから徒歩 2 分
電話番号	050-5877-5163 ※店からお客様へ電話連絡がある場合、こちらの電話番号と異なることがあります
関連サイト	https://www.hotpepper.jp/strJ003323212

三重大のツルの経験と約半世紀前の三重大での経験

クラス役員　早川 和久（7期化学）

1.ツルとはなにか

「一ツル（いち　つる）」「二金（に　カネ）」{三頭（さん　かしら）}これが早川家の家訓だ。」「ツルとは”つる植物”のつるの事で人とのつながりを意味する。いわゆるコネというのも意味に入る。」「金とはお金（カネ）の事で財産の形成も含まれる。」「頭（かしら）とは頭脳のことで知識を得る能力とか、いわゆる学校の勉強ができることなどのことだ。」と大学入試に向けて一浪していた私に父がいった言葉である。そして父は「いいか早川家では「頭（かしら）は最後の3番目でいいということで、それより重視すべきは人と人とのつながりのツルで、これが最も大切であって、その次はカネだが、頭がいいこととか知識の吸収力なんて（かしら）は最後でいいことを示している」と述べた。そして名古屋大学の工学部を卒業していた父は「自分が大学へいこうとする時に祖父から、なぜ大学にいきたいのかと聞かれて、勉強するためだと答えたら、勉強は自分で本を買って読めば大学なんかいかなくてもできるから無駄だと言われ、同じ志向をもつ友人を作るために学校にいくと答えたら　それなら大学にいってもいいと言われた。そこを考えて大学を選ぶべし」と言われたのがある。それで私は自分と似たような志向のほぼ同年代の学友が作りやすかろうと、なんとか合格できそうな大学で、志向にあった工学部化学系のところをいくつか受験したところだった。

そして受験して受かったところに三重大があり、すべり止め的に受けた自宅の埼玉から通えそうな私大があった。一人っ子で、1 人で生活したことがなかったので、家から合法的に「家出」ができると考え「三重大に行きたい。」と父に述べると、父はすぐに電話をとり「野田先生ですか、息子が三重大に合格して行きたいという。一人っ子で家から離れるので心配だ。」といって先方の話を聞いて「わかりました。」として私に「三重大は朝昼晩と3食とれる食堂もあり、病院も学内に付属しているし、散髪屋まで学内にある。（当時はあった） ぜひ三重大に行かれることを薦めると、三重大の3～4代の学長をした父が大学で無機化学を習った野田稲吉先生からの電話の話だった。三重大に行くべし。」と言われたのを今も覚えている。一ツルの実践をしているのだと私は思った。また野田先生は父の卒業論文の講座の先生でないはずで、学科の先生の一人にすぎなかった先生とのツルをずっと維持していたのか、そういえば、そういう名前の人の年賀状がきていたなと後から感心したところだった。

2.約半世紀前の三重大での経験

工学部3年まで、工業化学科クラスは毎年大学祭に参加していた。1 年生の時は、身長の半分くらいの径のあるゴム風船にヘリウムガスをつめ、その20個を発泡スチロールで作った”いかだ”のような基体につなげて、ラジコンで動くプロペラを左右につけた飛行船を大学の教養部から工学部まで飛行させようとした。これは、昭和 50 年（1975 年）11 月2日の毎日新聞（中勢版）（16 面）に【とんだ、とんだ!!新案「飛行いかだ」】という見出しの写真入りで掲載され、さらに同日付けの中日新聞（三重県総合版）（11

面)に【話題の飛行船は失敗　華やかに大学祭開幕】という写真入り記事に掲載された。三重大の学内はこの時期は強風になり、校内での上昇気流があまりに多くて、計算した浮力よりはるかに大きい状態となり、全く制御不能でヒモで引っ張って運ぶのが精いっぱいで最後は風でバラバラだった。担任の井沢康司教授の研究室の富岡秀雄助教授に、ヘリウムガスボンベの調圧機を借り、その使い方を教わった。

2 年生の時は、人が入れるくらいのシャボン玉はできないかというのと割れないシャボン玉はできないかといろいろ準備検討したが、人の首の先 10-20cm くらいの頭部が時には入れたシャボン玉はできたが、結局人が入れるシャボン玉と割れないシャボン玉はできなかった。多量にシャボン玉を飛ばす装置を作って実演したのと、関連した本にあったシャボン玉の七色の輝きに関する説明部分を拡大し、展示して、物理化学を教わった高橋彰教授に「学部の 2 年生でここまで勉強したという事については褒めてつかわす」と言われてうれしかった。割れないシャボン玉は、ずっと気になっていて卒業から約半世紀を経た今、自宅に設けた実験室で「ノンソープの口に入っても安全な触れるシャボン玉」として完成させ、学会にも発表した。詳しくは、
【https://www.youtube.com/watch?v=cz8FgFkWXmk&feature=youtu.be】(三重 TLO 専門人材バンク)での 10 分のムービーの中の 8 分-9 分あたりで見られる。

3年生では、いわゆる学園祭用のクラスの神輿(みこし)を作り、他の参加クラスや有志グループの神輿と共にかついて市内をめぐり歩いた。神輿は工業化学科だからということで石油タンクの形にして、3年生終了後に一年休学してアルプス登山ルートを開拓したクラスの酒井正人君がタンクに一時、登った状態で、かつぎまわった。当時の大学では、学園祭が始まる直前に大学で、いろんなクラス、有志からの神輿が作られて市内を回って大学祭の開催を宣伝していた。この時のムービーはクラス役員の吉永勇一君が当時撮影した 8 ミリ動画写真から DVD にして 2014 年に開催した 1979 年工業化学科卒(7期)の同窓会で配布し上映した。

3．4 年の研究室での出来事

4 年になると大学祭どころではなくなり、配属研究室で実験を懸命にした。助手の川口正美先生からの直接指導で、自分で測定した高分子電解質の水溶液の極限粘度というのと水溶液の塩濃度の関係のグラフを作成することをしていた時、助手の先生に見せて相談する前に、そのグラフのプロットが曲線になっているのを研究室の高橋彰教授に見せたら「曲線になるような測定をしているようでは話にならん。先行の研究から直線となるべきはずだ。もう一度やり直せ。」と言われ、しょげていたら、帰りがけの加藤忠哉助教授から「先行の研究には、直線になるべきものがあることを君は知らなければならない。しかし、もう一度測定しても曲線なら、曲線なんだと考えるべきだ。」と言われて再度測定したが、直線になってしまった。この話を卒業して 30 年も経たところで東京農工大学の四方俊幸教授に話をしたら「とても良い研究室を卒業されましたね。」と言われた。

4.ツルのおかけで就職

4年の配属研究室には信越化学工業(株)から徳谷直志研究員が大学の研究生として派遣されていてメチルセルロースという私からすると興味深い材料の分子量測定研究をしていた。それで修士課程の修了前の就職活動時期に研究室の高橋彰教授に信越化学工業(株)への入社試験を受けたいと相談した

ら、先生がその場で会社に電話され入社試験を受けさせてもらえることになった。ツルがなくてはできなかったところである。「三重大学の学生は入社したことがないが、1 人くらい入れたことのない大学の学生をいれとけ。当たるかもだ。」という重役の話だったと人事の人に言われたが、とにかく入社できた。「はずれたとは思ってない」と入社して 30 年経過したあたりで人事の担当だった人に言われた。信越化学工業(株)には研究開発職として定年退職した後も再雇用により研究開発職を継続して 2019 年 9 月末で退職した。

5.ツルのおかけで開発商品によって会社が表彰状をいただく

三重大に大学院博士後期課程を作るということで社会人の枠で 1995 年 4 月から 1998 年 3 月まで博士後期課程に会社の仕事をしながら在籍した。その時、修士課程の学生だった後輩が就職した会社での開発課題を改善できうる提供素材の開発ができたことで、その後輩が就職した会社から信越化学工業(株)は感謝状をいただけた。後輩が「私たちを紹介することで課題が改善できるかも」と考えて対応してくれたおかげであった。ツルのおかげだと感じざるを得なかった。

6.ツルのありがたさと同窓会

会社勤務中は三重大卒業生にあちこちで会った。先輩がいるという会社に向かった時に工業化学科の最初の卒業生の三浦久仁夫先輩が出迎えてくれて「自分は担当してない件だが担当者とうまくやれ」と担当者に紹介してくれた。ありがたかった。その他にも「大学の先輩(あるいは後輩)だから内密の話だけど‥」といろんな情報ももらえた経験が多くある。私は、この工学部同窓会によるツルのさらなる展開とその利用に大いに期待したいと思わざるを得ない。

以上

起業の決断

越智　博通（1 期電気）

時間が経つのも早いもので、今や私が大学を卒業し既に半世紀が過ぎ、年齢も 73 歳となった。この過ぎた半生を振り返り、自分が人生の途中で脱サラし 40 歳の時に起業した時から今日までのことについて回顧してみた。

私は父親の背中を見て育ったせいで、大学卒業後会社勤めするのが自分の進路と心得ていたので何のためらいもなく、サラリーマンの道を選択した。定年まで一つの会社をまともに勤め上げれば生涯平安に暮らせるだろうとイメージしていた。

大学在籍の時に「学生時代に起業！」という言葉がテレビや新聞・雑誌から頻繁に目や耳にしたのを思い出した。しかし具体的に何をテーマに起業するのか、資金はどうするのか、事務所をどうするのか、どのような形でスタートするのか等が未経験の私にはイメージを今一つ作り出すことが出来なかった。学生時代に一度起業の方向に進むと、学業を放棄することになるとの懸念もあり、結果的にそのまま脳裏を通り過ぎてしまった。今から思えば、学生時代に起業するとすれば、製造業などではなく、イニシャルコストが余りかからず、また場所も大して要らない IT 関係、ソフトウェア開発などのビジネスであればできたのではないかと思う。

学生時代、クラブ活動で自動車部に所属していた時、個人的に付き合いのあった大学の近くの自動車修理工場の社長からワケ有りの 3.5 トン車のトラックの出物を紹介され 15 万円ちょっとで購入した。その社長に近くの知り合いを紹介してもらい運送の仕事をもらった。同級生の南口君、河野君にも手伝ってもらって、白ナンバーであったが運送業者として 2 年余りサイドビジネスをしたことがある。

大学 4 年生のはじめ、当時就職担当だった（故）渡辺先生に呼ばれ、いくつかの採用募集が来ている大会社を紹介されたが、私は自ら先生に「出来るだけ小さな会社で将来性のあるところを紹介して欲しい」と申し出た。そこで紹介されたのが最初に就職した電子計測器・半導体試験機を製造販売している「タケダ理研㈱」（今一部上場になっている「アドバンテスト㈱」）であった。
1973 年、大学を卒業してこの会社に入社後、偶然にも会社のメインバンクから派遣された財務主幹の竹原常務取締役が三重高等農林学校（三重大の前身）のご出身の大先輩だということが分かり、在籍中は私にとても目を掛けてくれた。この時初めて学校繋がりの先輩の有難さを感じたのだった。
1975 年、たまたま中国の上海で国際電子展覧会が開催され、説明員として生まれて初めて海外に行く機会を得た。今思うと大先輩の竹原常務の計らいがあったと思う。

しかし、入社 5 年過ぎ、オイルショックから始まった世界的な金融危機に直面した時、この会社が倒産を余儀なくされるとの内部情報を耳にし、私は止む無く転職を決めたのだった。

次は海外輸出部門で仕事ができるということを前提に次の転職先を探した。その結果、入社した会社は「不二紙工㈱」（今一部上場になっている「リンテック㈱」）という私が学んだ電気工学とは全く関係のないラベル印刷用印刷機とその原紙を製造する特殊紙加工メーカーであった。
この会社に入社し希望通り輸出部門に配属された。海外代理店訪問で東南アジアを中心に何度も出張を重ねた。そういったある日、中国の天津から初めてラベル印刷機の引き合いが某商社を通じて舞い込んできた。私に中国ビジネスの経験があるということから商談をまとめて来いとの出張命令が出た。この商談を成立させ、それを機会に販売額が急速に伸び、海外事業部の総売上金額の半分以上を中国ビジネス一つだけで占めるようになった。出張ベースの販売方法では限界があり、北京事務所の設置を会社に申請、初代所長となった。1985 年のことである。
その 2 年半後、北京に出張で来た海外事業部長と意見がぶつかり総務部長まで調整のため北京に出てきたが、私が会社を辞す決意を変えなかった。

4 か月間失業保険をもらう中、熟慮の結果、二回も会社を替わったのでもう三度目のサラリーマンはないだろうと、1988 年、自分のマンションを本社にし、中国貿易を行う会社、「㈱東友」を設立登記することを決心したのだった。
私の起業を知人に持ちかけたら 10 人が各 100 万～200 万円ずつ出資の申し出があり、私の手持ち資金も含めて合計 3000 万円の出資金を作ることができた。
この後新会社を設立し、引き合いをもらいに何度か中国に出張し、いくつかの契約をまとめスタートを切った。
そうしているうちに、日本の大手の印刷用版材メーカーから同社の製品の中国向け輸出の代理店をして欲しいという話が舞い込んできた。私が中国の印刷業界に熟知しているという話を知人から聞き私の名前を知ったとのことであった。このビジネスの中国向け市場は大きく将来性があると察知した私は即快諾し早速販促活動を開始した。その時このビジネスのために新たに自分の名前を冠した「㈱博通行」という新会社を設立登記した。その後 1992 年、前に作った会社「㈱東友」を吸収合併し資本金 4000 万円の会社となった。このビジネスは、スタート時は展開に苦労したが、今では安定して毎年 4 億円前後を売り上げるビジネスに成長している。

その後 1993 年初めであっただろうか、北京で日系企業への支援事業を行っている親しい日本人の知人から、北京にラベル印刷ができる日系の会社がないので私にそれをやってくれないかとの話を受けた。私が長年従事してきた分野であり中国市場も熟知している、やることは必ずしもハイテクではないが、中国市場の大きさと将来のビジネス展開の可能性を確信し、次は中国でラベル印刷の会社設立しようと決断した。社名は「北京陸通印刷有限公司」（資本金 60 万ドル（当時約 6000万円））とした。中国大陸の「陸」と私の名前の一文字の「通」を取って名付けた。
この印刷のビジネスは全くのゼロスタートだったので開設から 3 年半余り赤字続きで遂に手持ち資金が底をつき明日倒産するかというところまで来ていた。その時、ラッキーなことに営業努力が実って急に大

口の注文が入るようになった。そこから悲願の黒字転換を果たし経営が回るようになった。中国で開業してからこの瞬間が一番嬉しかった。
その後業績が順調に伸び、北京開業 9 年後の 2003 年に念願の上海に、そして 2009 年には天津にもそれぞれ資本金 1000 万元(約 1 億 5000 万円)の二つのラベル印刷会社を設立した。この資金には北京の会社の未処分利益を充てた。
三重大自動車部の二年上級の当時の主将だった浅井先輩が日本の会社を定年退職されたばかりの 2007 年夏に北京旅行に来ていただいた。その時に相談した私の会社のお手伝いの話を受けていただき 2008 年から上海の会社で 8 年間余り、また 2011 年には三重大同級生の河野君にもお願いして、彼の日本の会社の退職後私の北京の会社に来て頂き約 5 年間、それぞれ総経理(社長)として経営の仕事をお引き受けいただいた。お二人のおかげでこの2社は大きく発展を遂げた。
2014 年 12 月に開催した北京の会社の開業 20 周年記念式展には川口先生と8名の同級生に北京までお越しいただき一緒に祝ってもらった。大感激であった！

北京陸通印刷有限公司(前景)

上海陸通印刷有限公司(前景)

上海陸通印刷有限公司(工場)

天津陸通印刷有限公司(前景)

途中、浅井総経理の助言もあり、中国全土に 2008 年から 10 か年で 10 拠点を作ろうと計画を立てた。一方、私は人生計画の中で、65 歳目途に事業拡大に向けて仕事に全力を傾けると心の中で目標達成期限を設定していたので、この長期計画を達成すべく社員と共に必死で頑張った。ところが 3 社目の天津の会社が中々黒字にならず停滞してしまった。実現しようと思っていた計画が、この三つ目の会社で期しくも私の決めた年齢のボーダーに達してしまったのである。志半ばであったが、10 か年計画を断念し名古屋の同業の会社に以降の経営を委託すべく 2015 年 6 月にこの 3 つのラベル印刷会社の私の出資分の全持分譲渡を行った。将来の経営をその会社に託し私は自分の人生計画通り身を引き身軽になった。
1989 年 6 月起業して以降 2015 年 6 月までの約 36 年間を振り返ると、危機もあったが幸運に恵まれ事業がここまで出来たのは、大学の同期、先輩の他、まわりのたくさんの友人が助けてくれたおかげだと皆さんに対し心から感謝している。
また 15 年間ほどのサラリーマン生活をしたおかげで、経営には素人であった私が、組織で進める会社経営の手法の一端を学ぶことが出来た。大会社の取締役をされていた浅井先輩からも経営に関する貴重なアドバイスをたくさんして頂き大きな助けになった。
また、自分が海外ビジネスに携わることが出来たおかげで、英語、中国語の二カ国語が何とかモノになる程度に身についた。

現在はまだ貿易会社が東京と北京にあり、10 人足らずのスタッフで引き続き貿易ビジネスを行っているが 78 歳を目標に全ての経営活動から手を引くことを決めている。その後の人生は成り行きに任せるつもりだ。
コロナでできた 3 年間のブランクもありこれからは、スピードを緩めて残りの人生を謳歌したいと考えている。

ロック徒然草～音とこころの旅

岡崎　健（1期電気）

第六段 「70 年代ロックの流れ」

70 年代は、ロックの大爆発と言うべき時代であった。現代ではクラシック・ロックと呼ばれてしまうが、ハード＆ヘビー・ロック、プログレッシブ・ロック、ソフト・ロック、ブルース・ロック、フォーク・ロック、カントリー・ロック、ブラス・ロック、ジャズ・ロックなどなど激しく枝分かれしていった。

プログレッシブ・ロックは、クラシック寄り、ジャズ寄り、トラッド・フォーク寄りなどあり、先進的とも言えない面もあるが、超絶テクニック、長い、幻想的などの特徴がある。

ビッグ 4 が、YES、KING CRIMSON、EMERSON, LAKE＆PALMER（ELP）、PINK FLOYD である。

70 年代直前の 1969 年リリースのアルバムは、前述のニール・ヤング及びレッド・ツェッペリンのファースト、セカンドに加え、プログレでは、キング・クリムゾンの「クリムゾン・キングの宮殿」というファーストアルバムにして大名盤が出ている。

他には、ブラス・ロックのシカゴのファースト、大御所ビートルズの「アビイ・ロード」、これも大御所ローリング・ストーンズの「レット・イット・ブリード」、ロックオペラの先鞭をつけたザ・フーの「トミー」、そして、「青い影」の大シングルヒットを 1967 年に飛ばしたプロコル・ハルムの 3 枚目「ソルティ・ドッグ」、ザ・ビートルズの「アビイロード」、ザ・キンクスの「アーサー、もしくは大英帝国の衰退ならびに滅亡」など重要盤が目白押しであった。

70 年以降では、プログレではピンク・フロイドの「狂気」1973 の大ヒット、自分としてはその前に出た「原子心母」1970 がお勧めであるが。イエスは、「こわれもの」1971、「危機」1972、キング・クリムゾンの「アイランズ」及び「レッド」1974、ELP は、「展覧会の絵」1971、「トリロジー」1972 が聴くべきアルバムである。

ハード／ヘビーロック界隈では、レッド・ツェッペリン4枚目の（Untitled）、ディープ・パープルの「マシーン・ヘッド」および「ライブ・イン・ジャパン」1972、ブラック・サバスの「パラノイド」1970、などが押さえるべきところか。

フォーク／カントリーロックのくくりでは、ザ・バーズの「Untitled」、ジャクソン・ブラウンの「Late for the sky」、CSN＆Y の「Déjà vu」、イーグルスの「ホテル・カリフォルニア」、Strawbs の「Grave New World」、「Bursting at Seams」、ニール・ヤングの「After the gold rush」、「Harvest」、パンク・ロックの部類に入ってしまうのか、Television の「マーキー・ムーン」、自分では、王道ロックと思っているのが、Boston の「幻想飛行」、The Kinks の「ローラ対パワーマン…」、Procol Harum の「グランドホテル」、Badfinger の「ノーダイス」及び「ストレートアップ」、Bruce Springsteen の「Born to run」、などである。

日本では、GS の流れを汲むハプニングス・フォー、このグループはザ・ビートルズのアルバム「アビイ・ロード」の B 面全曲をカバーしてライブハウスで演奏していたが、リードギターのいないバンドなのにキーボード主体でよくやれたと思う。本家のはライブに興味を失って、スタジオに籠って、やれるだけこねくり回して作り上げたレコードなのだが、遠く極東のバンドがライブでやってしまったのを聞いたら、かなり驚くだろう。当時の日本のロック系バンド恐るべし。内田裕也がいたザ・フラワーズの演奏は、1969 年頃、当時ジャズ喫茶と呼ばれていたライブハウス「銀座メイツ」？あるいは、「銀座 ACB」だったか、で聞いたことがある。内田がMCとボーカル、麻生レミがリードボーカル、リードギターが多分いなくて、ペダルスチールの小林勝彦がハード・ロック的な轟音を響かせ、かなり驚かされた。麻生はグループ解散後、渡米しロックバンド「WYND」を結成した。小林も渡米したと聞いている。内田は、次のグループ「フラワー・トラベリング・バンド」を立ち上げるが、本人は裏方にまわっている。リードボーカルの元「491（フォーナインエース）」出身の城アキラがジョー山中と名乗っての超絶ボーカル、ギターの石間秀樹のオリエンタルかつハードなギターなど強力なメンバーぞろいだった。彼らはカナダに渡りツアーを行った。

60 年代の名残りを感じるさせるグループでは、サイケデリック・ロックという LSD によるトリップ感覚を音と映像的な演出で聞かせるジャンルに含まれるジェファーソン・エアプレーン、ザ・シーズ、エレクトリック・プルーンズなどがある。

ソフトロックの範疇では、のちのディスコ・ブームでサタデーナイトフィーバーのサントラで大ヒットを飛ばすことになるビージーズやアソシエーション、ハーパーズ・ビザールなどが挙げられる。

70 年代ロックは、ロックと他の音楽ジャンルとの融合がかなりのスピードで進み、クラシック、ジャズ、ソウル、トラッドミュージックからの影響を受け、逆にそれらの音楽ジャンルへ影響を与えてもいる。

次回、自分自身の 70 年代ロック追求について。

三重大学発ベンチャー企業　株式会社プロジェクトＭ

松岡　守（5期電気）/杉井　位次（50期機械）/鳥田　莞太（教育学部４年）

【松岡】

学生起業の株式会社プロジェクトMのきっかけとなったのは、共通教育の「日本理解特殊講義（起業マインドの醸成）」という、松岡が平成19年度に共通教育において全学向けに企画・開設した授業で、当初は「アントレプレナー論」という授業科目名であったものです。普段は経営研究所を営む武田秀一氏を非常勤講師としてお迎えし、武田氏を中心に現役の起業家をゲストティーチャーに招いて経験を披露いただくなど実践に直接つながる授業展開をしており、これまでにも受講生の何人かが在学中、あるいは卒業後に実際に起業しています。この授業については紀要（「教養としての起業家教育の実践 「アントレプレナー論 －（起業）入門－」」大学教育研究　三重大学授業研究交流誌　2012、第20号、25-31）にまとめていますので詳細はこちらを参照いただければと思います。この論文は三重大学リポジトリの以下でも見ていただくことができるようになっています。

https://mie-u.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=6886&item_no=1&page_id=13&block_id=21

【杉井】

私は2021年7月1日に三重大学の学生である細川が代表取締役として設立した株式会社プロジェクトＭという会社に所属しています。細川が発案したアイデアが、「Mieet（ミート）」という三重大生限定コミュニティアプリの開発でした。「Mieet」という名前は「三重大生が出会う」という意味から、「mie」と「meet」を掛け合わせて作られました。プロジェクトＭを設立したのは私ではなく細川ですが、工学部の同窓会誌ということで今回は私工学部3年の杉井が紹介させていただきます。

株式会社プロジェクトＭは主に二つの事業に取り組んでいます。その中で私が関わっているのが、三重大生限定コミュニティアプリ「Mieet」の開発です。「Mieet」は初め株式会社プロジェクトＭと三重大学との共同研究という形で進められました。学生がアプリの機能を考え、ロゴやキャッチコピーを作成し、広報活動に取り組んだりしていく中で少しずつ形になって行きました。そして2021年10月、「Mieet」のWeb版がリリースしました。学生メンバーが教育学部の４人のみという少ない人員の中、友達の助けを借りながら学祭でビラ配りをするなどして積極的に広報活動に取り組み、報道メディアにも多数取り上げて頂きました。そのかいあってか「Mieet」の活動に興味を持ってくれる学生が少しずつ声をかけてくれるようになり、教育学部だけでなく工学部や生物資源学部、人文学部などの学生も「Mieet」の開発や営業、広報活動に関わってくれることになりました。

新メンバーが加わったことで、技術面も含めて事業のほぼ全ての内容を三重大生のみで行うことになりました。それにより、約半年間運営したウェブ版を終了し、さらに改良を加えたアプリ開発に向けて動き

出しました。開発メンバーにとっても初めての試みだったため、苦悩することも多くありましたが、2022年11月、ついに学生によって開発されたスマホアプリ版「Mieet」をリリースすることができました。しかしまだ完全なものというわけではなく、現在も学生からの声をもとに改良が続けられています。

私はこの活動をする中で、自分の価値観を変えられるような人達と出会い、自分の中に今までになかった視点を持つことができ、様々な面で成長することができました。そして、大学生時代の人との出会いが自分の人生に大きな影響を与える力があると強く実感しました。だからこそ、大学生のコミュニティを広げる「Mieet」には大きな可能性があると考えます。

今後、「Mieet」では企業と学生をつなぐ、就活面での機能も充実させていく予定です。学生同士が繋がるだけでなく、新卒採用を希望する企業と学生をつなぐことで、学生の将来に役立つ存在にしたいと考えています。そして「Mieet」が多くの三重大生に広がり、大学生活をより充実させる、必要不可欠なインフラ的存在になることを目指したいと思います。

【鳥田】

私は、2022年3月からプロジェクトMの一員となり、事業の準備を始め、2022年6月に「キッチンカーの居場所がわかるサービス『mogmap（モグマップ）』」をプレリリースし、事業が始動致しました。その後、2022年7月1日に2代目代表取締役に就任致しました。『mogmap』は、コロナ禍で外食が憚られる中、私がテイクアウトで食事を考えていた際に出会ったキッチンカーの味に感動を受けたことがきっかけで考案されたサービスでした。昨今のキッチンカーは非常に商材のレベルが高く、どのキッチンカーに食べに行っても、それぞれに特徴があり、どれも美味しいものばかりでした。しかし、移動販売が故に、出店場所を知らないと食べにいけないという状況が多々ありました。またあのお店に食べに行きたいと思っても、情報を収集することが難しかったり、他にもどんなキッチンカーがいるのだろうかと探そうと思った時にどこに情報があるのかがわからない状況がありました。そこでキッチンカーの出店場所がわかる情報総合サイトがあれば、こんな悩みはしないだろうなと考えたことがきっかけです。その「あったらいいな」を作りあげることに大きなやりがいを感じている日々を送っています。特にユーザー様から「これ、めっちゃ便利やな！」と言ってもらえた時は、嬉しくてたまりません。

また、2022年度は三重大学初の「ホームカミングデイ」イベントが開催されました。コロナ禍ということもあり、オンラインでの開催となり、その企画の一部と制作をプロジェクトMが担当させていただくこととなりました。非常にたくさんの方の大きなご助力のおかげで、なんとか形を作ることができ、無事に特設サイトでのホームカミングデイを完成させることができました。ホームカミングデイでは、全学部から抜粋した研究室の紹介や卒業生、在校生のインタビューなど、ボリューム満点のコンテンツが準備でき、多方面から良い評価をいただいております。自分のいた場所を想う気持ちは少なからず、全ての卒業生の方にあると思います。そんな中で、三重大学を思い出すきっかけに携われたことは、非常にプロジェクトMにとっても、プラスになり素晴らしい経験をさせていただいたと思います。おかげさまで、このイベントを通して、多くの方に認知していただき、学内でもたくさんのお声掛けをいただくようになりました。今後とも、三重大学発ベンチャーとして、三重大学とどのようなことができるのか、尽力していきたいと思います。

令和4年4月14日

工学部同窓会 会計報告

会計期間： 令和3年4月1日 ～ 令和4年3月31日

収入の部	
令和2年度からの繰越（決定額）	
預貯金	44,847,938円
定額貯金	13,000,000円
現金	19,430円
会費（令和3年度入会金）	7,651,104円
寄付金	0円
雑収入	
利息	276円
合　計	65,518,748円

支出の部（予定）	
運営費	
事務費	43,382円
会議費	6,000円
渉外費	0円
積立金	0円
ホームページ維持費	990,000円
予備費	0円
事業費	
会誌発行	4,860,000円
寄付講座	0円
同窓会主催合同企業説明会	0円
卒業・修了記念写真配布	0円
卒業生勤務先一覧作成	0円
会費回収強化	0円
会員のネットワーク化	0円
研究・奨学補助	1,510,714円
視察旅行	0円
グローバル人材育成	0円
年次総会実行	0円
その他	0円
令和4年度への繰越	
預貯金	45,088,722円
定額貯金	13,000,000円
現金	19,430円
合　計	65,518,748円

工学部同窓会　会長　柿崎賢一
工学部同窓会　会計　川中普晴、中西栄徳

会 計 監 査 報 告 書

三重大学工学同窓会 会長
　　柿崎 賢一　殿

　会計監査は，三重大学工学部同窓会の会則第 7 条ならびに同会の会計規則第 23 条の規定に基づき，当会の

令和 3 年 4 月 1 日から令和 4 年 3 月 31 日

までの会計報告書の収支決算の内容について監査したところ，決算は正確かつ適切であることを認めます.

会計監査　岡崎　健（1期電気）

国内におけるコロナウィルス感染症の拡大に伴い、自筆署名をいただくことができませんでしたが、メールにて監査報告・承認を得ております。

会計監査　井上　正則（3期電気）

国内におけるコロナウィルス感染症の拡大に伴い、自筆署名をいただくことができませんでしたが、メールにて監査報告・承認を得ております。

工学部卒業生人数

入学年（西暦）	卒業年（元号）	卒業年（西暦）	機械系学科	電気系学科	化学系学科	建築学科	情報工学科	物理工学科	卒業生数
1969	昭和48	1973	25	32					57
1970	昭和49	1974	33	43	25				101
1971	昭和50	1975	41	38	35				114
1972	昭和51	1976	38	35	31				104
1973	昭和52	1977	36	42	31				109
1974	昭和53	1978	66	40	37				143
1975	昭和54	1979	85	69	43				197
1976	昭和55	1980	84	73	67				224
1977	昭和56	1981	78	74	81				233
1978	昭和57	1982	80	82	77				239
1979	昭和58	1983	74	82	66				222
1980	昭和59	1984	75	84	71	33			263
1981	昭和60	1985	65	82	63	36			246
1982	昭和61	1986	81	73	85	37			276
1983	昭和62	1987	71	75	58	37			241
1984	昭和63	1988	80	85	88	42			295
1985	平成元	1989	71	76	84	35			266
1986	平成２	1990	91	93	87	38			309
1987	平成３	1991	94	90	90	50			324
1988	平成４	1992	99	95	95	32			321
1989	平成５	1993	91	97	92	58	30		368
1990	平成６	1994	100	104	96	45	41		386
1991	平成７	1995	105	106	102	55	36		404
1992	平成８	1996	102	102	98	60	44		406
1993	平成９	1997	121	111	104	50	40		426
1994	平成10	1998	103	111	111	51	41		417
1995	平成11	1999	117	115	102	47	44		425
1996	平成12	2000	122	107	93	50	42		414
1997	平成13	2001	105	112	99	59	51	34	460
1998	平成14	2002	88	87	97	51	61	42	426
1999	平成15	2003	99	99	98	51	62	42	451
2000	平成16	2004	76	94	96	52	55	42	415
2001	平成17	2005	86	100	97	44	59	41	427
2002	平成18	2006	99	92	91	56	55	46	439
2003	平成19	2007	84	81	96	50	54	37	402
2004	平成20	2008	102	87	98	43	62	33	425
2005	平成21	2009	92	98	99	41	55	40	425
2006	平成22	2010	74	89	112	59	56	46	436
2007	平成23	2011	87	99	98	46	57	38	425
2008	平成24	2012	99	88	97	49	52	46	431
2009	平成25	2013	78	85	107	41	59	37	407
2010	平成26	2014	89	85	95	47	65	37	418
2011	平成27	2015	95	84	97	46	44	37	403
2012	平成28	2016	89	79	99	49	51	44	411
2013	平成29	2017	82	100	96	49	57	40	424
2014	平成30	2018	96	94	98	54	56	33	431
2015	令和元	2019	94	86	99	52	47	40	418
2016	令和２	2020	91	96	94	56	52	42	431
2017	令和３	2021	87	88	99	48	58	42	422
2018	令和４	2022	90	88	93	44	62	34	411
2019	令和５	2023	92	102	100	59	55	3	411
2020	令和６	2024							
2021	令和７	2025							
2022	令和８	2026							
		合計	4302	4329	4267	1902	1603	876	17279

機械系学科：機械工学科、機械材料工学科
電気系学科：電気工学科、電子工学科、電気電子工学科
化学系学科：工業化学科、資源化学科、分子素材工学科

工学研究科修士･博士前期課程修了生人数

入学期	入学年(元号)	入学年(西暦)	修了年(元号)	修了年(西暦)	機械工学	機械材料工学	機械工学	電気工学	電子工学	電気電子工学	工業化学	資源化学	分子素材工学	建築学	情報工学	物理工学	合計
1	昭和53	1978	昭和55	1980	4	3		4			5						16
2	昭和54	1979	昭和56	1981	6	6		8	4		7						31
3	昭和55	1980	昭和57	1982	5	4		4	6		6	8					33
4	昭和56	1981	昭和58	1983	3	3		5	3		4	9					27
5	昭和57	1982	昭和59	1984	4	4		9	6		3	7					33
6	昭和58	1983	昭和60	1985	5	6		7	7		7	6					38
7	昭和59	1984	昭和61	1986	7	7		5	8		10	10					47
8	昭和60	1985	昭和62	1987	7	10		6	10		7	11		8			59
9	昭和61	1986	昭和63	1988	9	12		7	7		8	10		8			61
10	昭和62	1987	平成元	1989	10	11		5	10		9	11		10			66
11	昭和63	1988	平成２	1990	12	13		9	9		9	11		11			74
12	平成元	1989	平成３	1991	12	13		7	13		14	11		13			83
13	平成２	1990	平成４	1992	12	11		13	13		16	12		10			87
14	平成３	1991	平成５	1993	11	12		10	9		16	13		10			81
15	平成４	1992	平成６	1994	17	20		11	18		19	16		11			112
16	平成５	1993	平成７	1995	22	22		16	17		19	18		19	14		147
17	平成６	1994	平成８	1996	23	31		15	22		20	18		23	14		166
18	平成７	1995	平成９	1997		2	40			36			33	21	15		147
19	平成８	1996	平成10	1998			41			38			31	28	15		153
20	平成９	1997	平成11	1999			42			28			37	19	15		141
21	平成10	1998	平成12	2000			47			37			35	23	10		152
22	平成11	1999	平成13	2001			54			43			40	24	15		176
23	平成12	2000	平成14	2002			64			36			44	25	19		188
24	平成13	2001	平成15	2003			55			44			43	21	18	20	201
25	平成14	2002	平成16	2004			60			42			36	18	22	23	201
26	平成15	2003	平成17	2005			61			46			47	30	26	23	233
27	平成16	2004	平成18	2006			43			47			47	21	29	21	208
28	平成17	2005	平成19	2007			50			48			46	24	31	18	217
29	平成18	2006	平成20	2008			63			42			45	30	22	27	229
30	平成19	2007	平成21	2009			51			35			41	17	18	24	186
31	平成20	2008	平成22	2010			53			39			61	16	28	19	216
32	平成21	2009	平成23	2011			55			50			64	21	27	15	232
33	平成22	2010	平成24	2012			48			50			69	24	27	20	238
34	平成23	2011	平成25	2013			60			51			52	24	22	18	227
35	平成24	2012	平成26	2014			55			50			68	22	23	25	243
36	平成25	2013	平成27	2015			55			44			59	14	29	16	217
37	平成26	2014	平成28	2016			55			42			60	20	19	20	216
38	平成27	2015	平成29	2017			47			41			63	20	20	18	209
39	平成28	2016	平成30	2018			54			45			59	23	23	20	224
40	平成29	2017	令和元	2019			51			47			57	20	25	16	216
41	平成30	2018	令和２	2020			55			42			58	14	22	19	210
42	平成31	2019	令和３	2021			54			40			58	22	17	18	209
43	令和２	2020	令和４	2022			53			49			58	13	11	11	195
44	令和３	2021	令和５	2023			50			50			63	13	31	17	224
45	令和４	2022	令和６	2024													0
				合計	169	190	1416	141	162	1162	179	171	1374	690	607	408	6669

機械系専攻：機械工学専攻、機械材料工学専攻
電気系専攻：電気工学専攻、電子工学専攻、電気電子工学専攻
化学系専攻：工業化学専攻、資源化学専攻、分子素材工学専攻

工学研究科修士･博士前

院入学期	入学年（元号）	入学年（西暦）	修了年（元号）	修了年（西暦）	機械系専攻	電気系専攻	化学系専攻	建築学専攻	情報工学専攻	物理工学専攻	合計
1	昭和53	1978	昭和55	1980	7	4	5				16
2	昭和54	1979	昭和56	1981	12	12	7				31
3	昭和55	1980	昭和57	1982	9	10	14				33
4	昭和56	1981	昭和58	1983	6	8	13				27
5	昭和57	1982	昭和59	1984	8	15	10				33
6	昭和58	1983	昭和60	1985	11	14	13				38
7	昭和59	1984	昭和61	1986	14	13	20				47
8	昭和60	1985	昭和62	1987	17	16	18	8			59
9	昭和61	1986	昭和63	1988	21	14	18	8			61
10	昭和62	1987	平成元	1989	21	15	20	10			66
11	昭和63	1988	平成２	1990	25	18	20	11			74
12	平成元	1989	平成３	1991	25	20	25	13			83
13	平成２	1990	平成４	1992	23	26	28	10			87
14	平成３	1991	平成５	1993	23	19	29	10			81
15	平成４	1992	平成６	1994	37	29	35	11			112
16	平成５	1993	平成７	1995	44	33	37	19	14		147
17	平成６	1994	平成８	1996	54	37	38	23	14		166
18	平成７	1995	平成９	1997	42	36	33	21	15		147
19	平成８	1996	平成10	1998	41	38	31	28	15		153
20	平成９	1997	平成11	1999	42	28	37	19	15		141
21	平成10	1998	平成12	2000	47	37	35	23	10		152
22	平成11	1999	平成13	2001	54	43	40	24	15		176
23	平成12	2000	平成14	2002	64	36	44	25	19		188
24	平成13	2001	平成15	2003	55	44	43	21	18	20	201
25	平成14	2002	平成16	2004	60	42	36	18	22	23	201
26	平成15	2003	平成17	2005	61	46	47	30	26	23	233
27	平成16	2004	平成18	2006	43	47	47	21	29	21	208
28	平成17	2005	平成19	2007	50	48	46	24	31	18	217
29	平成18	2006	平成20	2008	63	42	45	30	22	27	229
30	平成19	2007	平成21	2009	51	35	41	17	18	24	186
31	平成20	2008	平成22	2010	53	39	61	16	28	19	216
32	平成21	2009	平成23	2011	55	50	64	21	27	15	232
33	平成22	2010	平成24	2012	48	50	69	24	27	20	238
34	平成23	2011	平成25	2013	60	51	52	24	22	18	227
35	平成24	2012	平成26	2014	55	50	68	22	23	25	243
36	平成25	2013	平成27	2015	55	44	59	14	29	16	217
37	平成26	2014	平成28	2016	55	42	60	20	19	20	216
38	平成27	2015	平成29	2017	47	41	63	20	20	18	209
39	平成28	2016	平成30	2018	54	45	59	23	23	20	224
40	平成29	2017	令和元	2019	51	47	57	20	25	16	216
41	平成30	2018	令和２	2020	55	42	58	14	22	19	210
42	平成31	2019	令和３	2021	54	40	58	22	17	18	209
43	令和２	2020	令和４	2022	53	49	58	13	11	11	195
44	令和３	2021	令和５	2023	50	50	63	13	31	17	224
45	令和４	2022	令和６	2024							
				合計	1775	1465	1724	690	607	408	6669

機械系専攻：機械工学専攻、機械材料工学専攻
電気系専攻：電気工学専攻、電子工学専攻、電気電子工学専攻
化学系専攻：工業化学専攻、資源化学専攻、分子素材工学専攻

工学研究科博士後期課程修了生人数

博士後期 入学期	入学年 (元号)	入学年 (西暦)	修了年 (元号)	修了年 (西暦)	材料科学 専攻	システム 工学専攻	合計
1	平成７	1995	平成10	1998	16	10	26
2	平成８	1996	平成11	1999	15	8	23
3	平成９	1997	平成12	2000	4	6	10
4	平成10	1998	平成13	2001	3	6	9
5	平成11	1999	平成14	2002	7	11	18
6	平成12	2000	平成15	2003	9	9	18
7	平成13	2001	平成16	2004	19	14	33
8	平成14	2002	平成17	2005	10	10	20
9	平成15	2003	平成18	2006	1	12	13
10	平成16	2004	平成19	2007	7	12	19
11	平成17	2005	平成20	2008	3	8	11
12	平成18	2006	平成21	2009	4	6	10
13	平成19	2007	平成22	2010	9	5	14
14	平成20	2008	平成23	2011	7	5	12
15	平成21	2009	平成24	2012	8	4	12
16	平成22	2010	平成25	2013	8	9	17
17	平成23	2011	平成26	2014	6	3	9
18	平成24	2012	平成27	2015	11	7	18
19	平成25	2013	平成28	2016	2	5	7
20	平成26	2014	平成29	2017	6	8	14
21	平成27	2015	平成30	2018	7	5	12
22	平成28	2016	令和元	2019	5	2	7
23	平成29	2017	令和２	2020	4	6	10
24	平成30	2018	令和３	2021	2	4	6
25	平成31	2019	令和４	2022	7	2	9
26	令和２	2020	令和５	2023	4	5	9
27	令和３	2021	令和６	2024			
28	令和４	2022	令和７	2025			
				合計	184	182	366

三重大学振興基金のご案内

三重の力を世界へ 世界から三重へ 未来を拓く地域共創大学

三重大学は平成16年度から国立大学法人という新たな組織形態に移行し、「三重の力を世界へ：地域に根ざし、世界に誇れる独自性豊かな教育・研究成果を生み出す～人と自然の調和・共生の中で～」という基本目標を掲げて、地域の社会や住民の皆様との緊密な連携をとりつつ、「人類福祉の増進」「自然の中での人類の共生」「地域・国際社会の発展」に貢献できる「人材の育成と研究の創成」に、教職員一同力を合わせて取り組んで参りました。

このような高いミッションの実現に向かって、国立大学法人としての目標を達成し、地域社会からの期待に十分応えることの出来る大学に成長・発展を遂げるためには、学部学生、大学院生、留学生などの修学環境の整備とキャリア支援、国際教育研究交流事業の推進、産官学民連携活動の強化等、多くの重点課題に取り組むことが大切と考えています。しかし、法人化以降、大学運営の効率化とともに基盤的予算の削減が既定路線となり、新たな課題に対する戦略的、裁量的投資の余地は極めて限られてきているのが現状です。

このような状況を鑑み、大学全体の組織として「三重大学振興基金」を設立し、広く学内外の皆様からのご好意をお受けして参りました。卒業生をはじめ地域社会の皆様のご理解とご協力を仰ぎながら、引き続き「基金」を運営・発展させることにより、自主的・戦略的に大学の活動を発展させて行きたいと思います。

このような趣旨にご理解とご賛同を賜り、格別のご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

三重大学 学長
伊藤 正明

振興基金事業のご報告

各事業名は省略して記載させていただいております。

2021年度寄附実績：31,677,110円

寄附額に対する寄附者別の内訳

寄附者別	教職員	一般	企業	卒業生	団体等	保護者
寄附額（千円）	4,115	21,490	2,670	677	2,605	120
割合	13.0%	67.9%	8.4%	2.1%	8.2%	0.4%

寄附額に対する事業別の内訳

事業別	振興基金	修学支援	課外活動	附属病院	地域活性化	その他
寄附額（千円）	15,440	10,981	1,580	1,125	1,010	1,541
割合	48.8%	34.7%	5.0%	3.5%	3.2%	4.8%

2021年度活動報告：8,598,897円

一般基金

千円

振興基金事業	経済困窮学生への食の支援	3,940
	パンフレット作成	704
	返礼品等の購入 他	660
計		5,304

特定基金

千円

修学支援事業	入学特別奨学金	500
課外活動施設事業	馬術部の活動費	1,000
工学研究基金	テレキューブ設置	1,287
各事業	その他	508
計		3,295

2022年度取組目標

一般基金

振興基金事業	学生のクラブやボランティア活動への支援
	地域共創プラザ（第一食堂）建設への支援
	クラブハウス建設への積み立て

特定基金

修学支援事業	入学特別奨学金（@50000円×15人）
地域活性化事業	各サテライトでのシンポジウム等 開催
防災・減災事業	防災アカデミー 開催

MIE UNIVERSITY

第一食堂から「地域共創プラザ」へ

三重大学への寄付のご案内

寄付のお申込には以下の2通りの方法があります。（振込手数料は本学が負担します）

1. インターネット申込

三重大学振興基金ホームページ（https://www.mie-u.ac.jp/foundation/post-10.html）から、
以下のお支払い方法で寄附申込みをしていただくことができます。
クレジットカード決済／コンビニ決済／インターネットバンキング決裁Pay-easy

2. 郵便振替・銀行振込

三重大学振興基金事務局（059-231-9005）へご連絡いただき、専用振込用紙等を郵送いたします。

税制上の優遇措置

個人からのご寄附

○**所得控除**・・・全ての寄附事業に適用
寄附額が年間2,000円を超える分について、当該年所得の40%を限度に所得控除を受けることでできます。

○**税額控除**・・・修学支援事業限定
上記所得控除に加え「税額控除」の適用対象となり、確定申告の際にいずれかを選択できます。
（控除対象となる寄附金額が当該年所得の40%が限度、控除される所得税は税額25%が上限）

法人からのご寄附

法人税法第37条第3項第2号により、寄附金の全額を損金として算入できます。

国立大学法人 三重大学

お問い合わせ
三重大学振興基金事務局【研究・地域連携部社会連携チーム内】
〒514-8507 津市栗真町屋町1577番地　TEL. 059-231-9005　FAX. 059-231-9047　E-mai：kikin@ab.mie-u.ac.jp

編 集 後 記

2014 年に三重大学工学部同窓会誌が同窓会設立 40 周年で復刊し、「あの津から」と題した同窓会誌の Vol. 10 を何とか刊行することができました。これも、編集委員の皆様、及び同窓会会員の皆様方のご協力のおかげであり、心から御礼を申し上げます。

2022 年度は、コロナ禍でまだまだ全面的に対面の講義がなされておらず、三重大学のキャンパスも静かでしたが、2023 年度は、ほぼコロナ前に戻ってにぎやかなキャンパスになりそうです。

同窓会誌では、「随筆」「在学生に向けて」「卒業生が立ち上げた会社紹介」「私のサラリーマン人生」等の原稿を募集しております。長年、頑張ってきたので、これまでの足跡を文章に纏めたい方は、ぜひご連絡ください。

三重大学工学部同窓会誌

あの津から

発行日　2023年6月1日

三重大学工学部同窓会

会　長　柿崎　賢一　（第 4 期電気工学科）

編集委員会

委員長　金子　聡　（第 20 期工業化学科）
委　員　岡崎　健　（第 1 期電気工学科）
堀尾　隆　（第 1 期電気工学科）
松原　辰巳　（第 2 期工業化学科）
奥田　栄次　（第 2 期工業化学科）
野呂　雄一　（第 12 期電気工学科）
若林　哲史　（第 13 期電気工学科）
中西　栄徳（第 23 期機械工学科）

本同窓会誌のバックナンバーは、
三重大工学部同窓会の WEB サイトで
ご覧いただけます。
https://www.dousoukai-mie-ueng.org/

表紙写真より

今号の表紙は大学の西方に見える長谷山（標高320m）の山頂からキャンパスの方向を撮影した写真にしてみました。第3号の裏表紙でも青山高原から撮影した写真を紹介しましたが、今回の方が距離も近い（大学から約8.5km）ため、より鮮明な写真になっています。こちらに別の方角を撮影した写真も掲載しておきますので、冬の澄んだ空気を通した山頂からの眺望をお楽しみください。

工学部同窓会HP

https://www.dousoukai-mie-ueng.org/